

日口浮魚・底魚類 (総説)

最近一年間の動き

日口間には、北西太平洋の生物資源の保存及び最適利用を考慮し、相互の 200 海里水域で他方の国が漁業を行うために、1984 年に日ソ地先沖合漁業協定 (通称：日口地先沖合協定) が締結され、これに基づき日口漁業委員会が設置されている。日口漁業委員会では、日口両国水域に共通に存在する主要な魚種系群の持続的利用を協議するため、科学者グループを設置し、両国科学者が、それらの資源状態を協議し報告書を作成している。

第 28 回日口漁業委員会の決定に従い、両国科学者は以下の諸活動を行い、日口両国が双方の水域内で利用している同一資源について最新の情報を交換し、資源状態に関する見解をとりまとめた。2012 年 9 月にウラジオストック市において「さんま、まさば、まいわし、かたくちいわし、いか及びすけとうだらの生態学及び現存量に関する意見交換会」を開催し、サンマ、スケトウダラ、イカ類等の研究課題を報告し、議論を行った。2012 年 11 月に東京都において「第 26 回日口漁業専門家・科学者会議」を開催し、資源状況などに関する資料及び意見の交換を行い、資源に関する見解と 2013 年の調査協力計画案を作成した。2012 年 11～12 月に東京都で開催された「第 29 回日口漁業委員会」において当該調査協力計画案を検討し採択した。

ロシアと我が国漁業の歴史

我が国の北洋漁業、特にロシア沖における漁業として、日露戦争の結果による領土の拡大にともなう漁場の広がりもあり、大正時代には母船式カニ漁業、帆船タラ漁業等が興った (斉藤 1960)。昭和初期には、母船式さけ・ます漁業、トロール漁業も含め発展したが、第 2 次世界大戦によってこれら漁業は大きな被害を受けた。第 2 次世界大戦後、マッカーサーラインによって我が国漁船の漁場は著しく狭められていたが、1952 年に同ラインが撤廃されるとともに、ソ連邦沖公海新漁場の開発が積極的に進められた (北野 1980)。1953 年に北方四島周辺太平洋岸漁場、1956 年にサハリン東岸タライカ湾、1957 年にサハリン西岸タタル海峡で調査が行われ、スケトウダラ、ホッケ、カレイ類等の底びき網漁場が開発された (北野 1980)。1956 年には日ソ漁業条約、1969 年には日ソかに取決、1972 年には日ソつぶ取決が結ばれた。我が国漁船のソ連沖での漁獲量としては、1975 年には北海道沖合底びき網が 38.9 万トン、北転船がカムチャッカ半島周辺で 73.3 万トン等であった (北野 1980)。

一方、ソ連漁業による日本沖での漁獲量は、1975 年にはサバ 13.3 万トン、マイワシ 12.2 万トン、スケトウダラ 13.4 万トン、イトヒキダラ 10.6 万トン等、合計 52.7 万トンであった (北野 1980)。1976 年 12 月にソ連は漁業管理法を制定し、200 海里漁業水域を設定したが、我が国も 1977 年 3 月に同

漁業水域を設定した。1977 年には日ソ・ソ日漁業暫定協定、1978 年には日ソ漁業協力協定が結ばれ、相互に相手国 200 海里水域で自国の漁船が操業できるようになった。1978 年にソ連漁業水域内で我が国漁業に与えられた漁獲割当量 (漁獲枠) は、スケトウダラ 34.5 万トン、イカ 14.6 万トン、イカナゴ 6.5 万トン、マダラ 4.5 万トン、サンマ 6.9 万トン等、合計 85 万トンであり、200 海里水域設定以前の漁獲量に比べかなり減少した (北野 1980)。同年の日本漁業水域内におけるソ連漁業への漁獲割当量は、マイワシ・マサバ 31.8 万トン、スケトウダラ 8.0 万トン、イトヒキダラ 13.8 万トン等、合計 65.0 万トンであり、200 海里水域設定以前の漁獲量とそれほど差はなかった (北野 1980)。

相互の相手国 200 海里水域内での割当量の推移として、ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量の経年変化を図 1 に示した。1979～1985 年には、割当量は 60～75 万トンの範囲であったが、1986 年には 15 万トンへと大きく減少した。1987 年にはそれまでの無償枠の他に、日本漁船に対してソ連水域で 10 万トンの有償枠が設けられるようになった。我が国漁業に対する割当量は、1988 年には相互枠と有償枠を含めてスケトウダラ 12.8 万トン、サンマ 6.5 万トン、イカ 7.5 万トン等、合計 31 万トンとなった。1998 年にはスケトウダラ 1.6 万トン、サンマ 3.2 万トン、イカ 4.1 万トン等、合計 10.6 万トンとなり、20 年前の 1978 年の 8 分の 1 となった。我が国漁業に対する割当量は、2005 年以降、5.6～5.8 万トンで推移していた。2013 年は、6.7 万トン (相互入漁 6.2 万トン、有償入漁 5.1 千トン) と前年より 2 割増加した。漁業種類別には、さんま棒受網、遠洋底びき網 (北転船)、いか釣り、沖合底びき網の順に割当が多い。

日本水域におけるロシア漁船に対する割当量は、1985 年以降我が国漁船に対するロシアからの相互枠と等量で推移しており、1988 年には 21 万トン、1998 年には 9.5 万トンとなったが、2004 年は 5.5 万トンとなり、それ以降は 5.0～5.2 万トンで推移している。魚種としては、1980、1990 年代はマイワシ・マサバが最も多かったが、2001 年以降はイトヒキダラが半分以上を占めていた。2013 年の割当量はイトヒキダラ 2.8 万トン (前年同)、サンマ 2.1 万トン (同 64% 増)、マイワシ・マサバ 1.3 万トン (同 24% 増) となった。

ロシア水域における実際の我が国の漁獲量の推移を図 2 に示した。相互枠と有償枠を合わせて、我が国漁船の漁獲量は 1979 年の約 54 万トンが最も多く、スケトウダラが約 5 割を占めた。1986 年には約 7 万トンに急減したが、1988 年には約 17 万トンに回復した。その後は直線的に減少し、2002 年には 1.2 万トンとなったが、2004～2006 年には 4.5～5.1 万トンに増加した。2007～2009 年には 2.3～2.7 万トンに半減したが、その後は 3.4 万トンに回復している。1980 年代前半はスケトウダラ、その後はサンマが最も多く漁獲された。割当量に対する漁獲量の割合は、1980 年代は 50～70% であっ

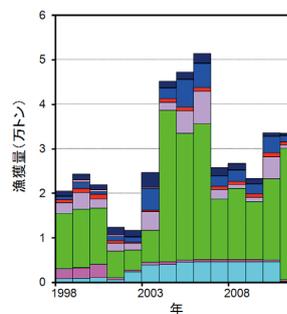
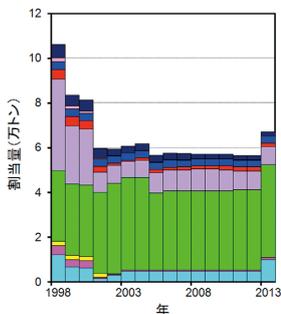
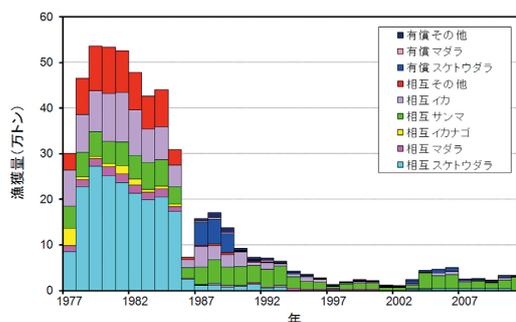
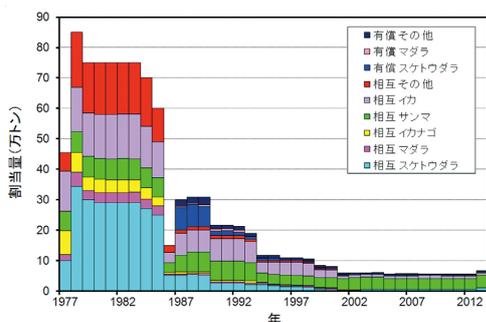


図 1. ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量の経年変化 (右は近年の拡大)

図 2. ロシア水域における我が国漁船の漁獲量の経年変化 (右は近年の拡大)

たが、90年代には20～30%程度に低下した。2004～2006年には再び70～90%に上昇したが2007～2009年は50%以下に低下した。2010年以降は60%近くに回復している。

我が国水域におけるロシア漁船の漁獲量は、1985～1992年には5～15万トンで、マイワシとマサバが大部分を占めたが、1994年以降ほとんど漁獲されなくなった。最近ではイトヒキダラのみが漁獲されていたが、2010年以降はサンマも漁獲されている。2000年以降のロシア漁船による漁獲量は、2.4～2.7万トンで推移していたが、2008年以降2万トンを割っている。2011年は震災によるロシア側の操業自粛により入域が遅れたため、漁獲量は1.2万トンと前年の3分の2に減少した。

なお、日本漁船は、日ソ地先沖合漁業協定の他に日ソ漁業協力協定、北方四島周辺水域操業枠組協定及び貝殻島昆布協定(民間)に基づく操業も行っている。

日口両国水域にまたがって存在する資源に関する資源評価

2012年の日口漁業専門家・科学者会議において、日口両国が双方の水域内で利用している同一資源の状況に関して、両国の科学者は、以下の通り、共通の見解を持った。スケトウダラ、サンマ、スルメイカ等については、ロシア水域での分布や資源状態に関する情報が、それらの適切な資源評価及び評価結果を踏まえた資源管理のために重要であり、引き続き、日口科学者による意見交換会等の機会に、これらの情報収集に一層努める必要がある。

- (1) サンマ：現状において資源は十分高い水準にあり、漁業の資源への影響は僅かであるが、年毎の資源変動は大きいことから、今後の動向には注意を要する。
- (2) マイワシ：1990年代に太平洋の資源は急激に減少した。

一方、現状においては太平洋の資源は低水準にあるが、近年、その増加傾向が認められている。対馬系群の資源は増加が認められるものの、その水準は低位であることから、今後の動向には注意を要する。

- (3) マサバ：太平洋の資源状況は依然低水準にあるが、2000年代前半の最低水準は脱した。
- (4) カタクチイワシ：資源は十分操業可能な中位水準にある。
- (5) スルメイカ：年毎の変動にも関わらず、太平洋及び日本海におけるスルメイカの資源量は過去30年程度の期間で見ると比較的高い水準にある。
- (6) ニシン：サハリン・北海道系ニシンの資源は何らかの増加の兆候もないまま極めて低い水準にある。
- (7) スケトウダラ：北部日本海系群の資源は1990年以降低水準にある。

表 1. ロシアによる TAC 数量 (トン) の推移

魚種名	2012年	2013年
スケトウダラ	655,800	617,900
マダラ	40,700	46,200
コマイ	7,780	7,700
ホッケ類	52,700	47,200
メヌケ類	5,099	4,738
キチジ	372	515
カレイ類	10,215	8,835
タコ類	240	240
ニシン	9,900	8,600

ロシアからの割り当てに関係する その他の重要資源に関する情報

ロシアから入手可能なマダラ、キチジ等の重要資源に関する情報は少ない。ロシアは、これら魚種についても資源調査を基に TAC を設定しているため、これらの TAC は基本的に資源動向を反映していると考えられる。ここでは、我が国漁船が漁獲している主な魚種に関するロシアが設定した極東水域の TAC 数量を記載する（表 1）。

執筆者

北西太平洋ユニット
東北区水産研究所 資源海洋部
山田 陽巳

参考文献

- 北野 裕. 1980. 北海道海域底魚資源. *In* 青山恒雄（編）, 底魚資源. 恒星社厚生閣, 東京. 204-228 pp.
- 斉藤市郎. 1960. 遠洋漁業. 恒星社厚生閣, 東京. 318 pp